

山岸による「マタイ受難曲」翻訳の特徴

ここでは、一般的な翻訳と私の翻訳との間で、目立って異なる部分についての解説を加える。

1. Du sages't's.問題

この問題について詳しくは http://classic.music.coocan.jp/pdf/Du_sages't's.pdf

私は、Du sages't's.を「お前の言う通りだ」と訳していない。マタイにはこの言葉がイエスの台詞として3回出てくる。

- ①. 第11曲 (マタイ 26:25) ……晚餐が始まる直前
ユダ「(裏切ったのは)私ですか」、イエス「Du sages't's.」
- ②. 第36a曲 (マタイ 26:63-64) ……大祭司カイファの尋問
カイファ「お前は神の子キリストなのか」、イエス「Du sages't's. Doch sage ich euch....」
- ③. 第43曲 (マタイ 27:11) ……総督ピラトの尋問
ピラト「お前はユダヤの王なのか」、イエス「Du sages't's.」

この3カ所とも CD の歌詞対訳は「その通りだ」となっている。1958年リヒター盤に付けられた杉山好氏の訳「汝の言える如し」は、大正時代の「文語訳」聖書の語り口である。

日本聖書協会が1954年に出した「口語訳」も「その通りである」となっている。(①は「まさか私ではないでしょう」「いや、あなただ」という超意訳。)

だが日本聖書協会による1978年「共同訳」、1987年「新共同訳」、2018年「聖書協会共同訳」のいずれにおいても、3カ所とも「**あなたがそう言っているのだ**」と訳されている。

新約聖書ギリシア語原典に、単に「あなたがそう言っている」とあるから、ルターもそれを直訳して「Du sages't's.」と訳したのである。そして**教会で読まれる聖書も、既に40年前からそのように訳されている。**

「あなたの言う通りだ」と「あなたがそう言っているのだ」では正反対の意味になる。そして、**前者の訳だと真っ当な物語展開にならない**。それについて、上記3箇所を逆順に1つずつ検討してみよう。

③. 総督ピラトの尋問

ここではまず、キリスト教の教義として、「お前はユダヤの王なのか」と問われて「その通りだ」と答えるような**イエス像が良いはずがない**。イエスは異邦人も救う存在なのだから。

もう1つ。ピラトに「お前がユダヤの王なのか」と聞かれてイエスが「その通りだ」と答えたら、それで尋問は終了のはずである。訴えられた内容をイエスが認めたのだから。

しかし聖書の物語はそうになっていない。この場面に続くのは、

イエスは祭司長や長老たちから訴えられていたが、何も答えなかった。するとピラトはイエスに言った。

「お前は聞こえないのか、どんなに厳しく彼らがお前を告発しているか？」だがイエスは一言も答えなかった。それ故また、総督は大変不思議に思った。

そしてバツハはその後に、「尋問にまともに答えず沈黙するイエス」を承けて、「委ねよ」のコラールを付けているのだ。ギリシア語聖書・ルター・バツハの3者間に誤解は無い。この解釈は、

「(私がユダヤの王だというのは)あなたが言っていることだ。(私の知ったことではない。)」
というのが正しい。(『ヨハネ福音書』でのピラトの尋問に対するイエスの返答については後述する。)

②. 大祭司カイファの尋問

ここで「お前は神の子キリストなのか」と問われたイエスの台詞は、Du sages't's.の後に、「しかし、わたしはあなた方に言う。今後あなた方は、人の子が力ある方の右に座り、天の雲に乗って来るのを見るだろう。」と続く。このDu sages't's.は「その通りだ」と訳しても良さそうな雰囲気がある。

しかし、ここでイエスは「神の子なのか」と聞かれたのに対して「人の子は」と答えている。福音書全体を素直に読めば、「神の子」だと言っているのは周囲の人々であり、イエスの自称は「人の子」である。だからDochという逆接の接続詞なのだ。(英訳RSVも「You have said so. **But** I tell you,...」だ。)

Doch以降の言葉は、イエスがユダヤ教幹部たちを前に挑発的に語った言葉である。

「お前たちは私を神の子とか言ってるが、そんなことは知ったことじゃないよ。でもお前たちは既に私を逮捕して、死刑にしたいんだろ。だったら言ってやるよ。」ということだ。もちろん史実としてイエスがそう語ったというのではない。彼の物語の伝承の過程で「イエスってこういう言い方する人だったよね」ということで付加された台詞であろう。

ここには、「安息日のために人がいるのではなく、人のために安息日があるのだ。」等々、ユダヤ教に対してとことん挑発するイエスの性格が表れている、と考えるべきだろう。

①. ユダに対して

福音書の物語は、イエスはユダが裏切っていることを知っている、という前提で書かれている。だからユダが「裏切ったのは私ですか」と言ったのに対して、イエスは「その通りだ」と答えるのは当然だ、と

多くの人が思っているだろう。

しかしそれは違う。私は学生時代に「マタイ受難曲」で聖書の物語を知って以来、ずっと疑問に思っていた。イエスに「裏切者はお前だ」と言われたユダが、そのまま「最後の晩餐」に同席していられたのだろうか？と。イエスはその直前には、「その裏切者にとって良かったのは、生まれてこないことだったのに..」とまで言っているのだ。

つまり、イエスはユダに「生まれてこなければ良かった裏切者というのはお前だ」と宣告したことになり、しかも、それを承けてもユダは退席していない。ここには、冷酷なイエス像、かつ極めて不自然なストーリー展開という2つの問題点がある。

また、ユダがイエスに「お前が裏切者だ」と宣告されたのなら、それこそ重大事であり、バツハはここにアリアなりコーラルなりを当然挿入するはずだ。なぜそういう構成でないのか？

一方、「共同訳」以降の新しい翻訳の聖書では、ここでも「それはあなたが言っていることだ」となっている。すると今度は、その台詞をどう解釈したらよいのか、よく分からない。

これらの疑問・問題点を全て解決する名訳、「お前がそう言うのか」は、『イエスという男』『書物としての新約聖書』などの著書で知られる聖書学者、田川建三氏によるものだ。氏は、ギリシア語の新約聖書原典を各種写本にまで遡って研究し、とことん正しく直訳するという偉業を成し遂げた。その著書『新約聖書 訳と註』は訳文の数倍の分量の注釈がついているのだが、この部分に関しては特に何も注釈が書かれていない。しかし、この訳によって、次のような場面の解釈が成り立つ。

もちろんイエスはユダの裏切りに感づいていた。しかし自分の行ってきただけの過激さを思えば、当然そういう裏切者が身内から出ることもあり得る、とも意識していた。そしてその裏切者も最終的には悲惨な運命をたどるであろうことも分かっていた。だからこそ、その彼の行く末を思い、「彼にとってより良かったのは生まれてこないことだったのに.. (かわいそうに)。」という台詞を吐いた。

しかしその後、(よせばいいのに)ユダが周りの弟子たちに続けて「私のことですか」などと言う。イエスがここで、皆の前で「その通りだ」などとはとても言えるわけがない。「お前がそういうのか....」と、憐れみとも呆れとも何ともつかない表情で答えた。そういうことだろう。

ところが音楽学者の礪山雅氏は、その著書『マタイ受難曲』で、「ドイツ語の口語では今日でも『その通りだ』という意味にこの言葉を使う」と書いていて、ここでもそう訳している。

しかしこの言い分が成り立つためには、①聖書翻訳以前から Du sagest's. や You said it. がその意味で使われていたこと、②ローマ時代のギリシア語で「あなたがそう言っている」が「あなたの言う通りだ」の意味であったこと、この2点を証明しなくてはならないはずだ。

また礪山氏は「ここでのバツハの音楽も、曖昧な含みを残していない」とも書かれている。

大家に対して失礼を承知で言わせてもらえば、少なくともこの場面に関しては、礪山氏はバツハの音楽から何を聞いているのか甚だ疑問である。

バツハがここで Du sagest's. に付けた音楽は、他の2カ所とは違い、疑問文を思わせる上昇音型である。さらに弦の伴奏も、決然たるカデンツではなく、むしろ事をウヤムヤにするような後奏がついて、そのまま晩餐の場面につないでいるようにしか聞こえない。

さらにバツハは、後でユダが後悔して自殺した所では、ユダを「ルカ福音書」第15章に出てくる放蕩息子になぞらえた歌詞のアリアを付けて、ユダを“救済”しているのだ。

よって、バツハも福音書の物語を上記のように解釈していたに違いないと、私は考える。

ちなみに最古の福音書である『マルコによる福音書』では、イエスが「その者は生まれてこなければよかった」と言った後、すぐに最後の晩餐になり、ユダとイエスのやり取りは無い。イエス逮捕の場面でユダがイエスに接吻したことは書かれているが、その後、ユダは登場せず、彼が自殺する話も載っていない。『ルカに福音書』でもほぼ同様である。『ヨハネ福音書』の受難物語にはユダが一切登場しない。つまりこの問題は『マタイ福音書』のみの問題である。

※. 番外編 「Du sagest's.問題」は、「ヨハネ受難曲」にもある。ピラトの尋問の場面である。

ピラト「お前はユダヤ人の王なのか？」

イエス「あなたは自分自身でそう言っているのか、それとも誰か別の者が私についてあなたにそう言ったのか？」

ピラト「私がユダヤ人 (のような人間だというのか) ? お前の民族と祭司長たちは、お前を私に引き渡した。

お前は何をしたのだ？」

イエス「私の国はこの世のものではない。もし私の国がこの世のものだったならば、私の従者たちが戦って私が

ユダヤ人に引き渡されないようにするだろう。しかし今は、私の国はここには無い。」

ピラト「それではやはりお前は王なのか? So bist du dennoch ein König?」

これに対するイエスの返答は、ルター訳では「Du sagest es, ich bin ein König.」であり、間に接続詞が無く、文法的に不自然だ。直訳すると「あなたがそう言う、私は王である」となる。何とか意味が通るようにするなら、間に(その通り)を補って訳す以外にない。(だからシュッツ「ヨハネ受難曲」の対訳を担当した際、山岸も仕方なくそう訳した。)

しかしこの箇所も、ギリシア語聖書の正しい翻訳は、「私が王だということは、あなたが言っていることだ。」となる。(英訳 RSV では「You say that I am a king.」となっている。)

つまり、ルターはここで確信犯的に、2つの節の間に接続詞 **dass** を置かず、曖昧かつ不自然な訳にしている。**おそらくルターは、ピラトの最後の質問が「ユダヤの王なのか」ではなく、「王 ein König なのか」というものだったのを承けて、ここでイエスに「私は王だ」と語らせてみたかったのであろう。(ルターは決して正しい翻訳に徹した人ではない。こういう改竄もたくさんしている。)**

2. 第40曲のコラールの訳の改訂

このコラールは、有名な「ペテロの否認」を承けてのアルトのアリア「**Erbarne dich, mein Gott**」の後で歌われる。その訳の改訂は2019年2月になってから行ったので、皆さんに配布された訳からは変更されている。かなり大きな解釈の変更なので、ここで解説する。前半4行は以下の通りである。

Bin ich gleich von dir gewichen, stell' ich mich doch wieder ein; hat uns doch dein Sohn verglichen durch sein' Angst und Todespein.	私は、たとえあなたから離れても、 きっと再び(あなたの元に)戻ってきます。 あなたの御子が私たち(神と私)を仲介したのです。 彼の恐れと死の苦しみによって。
---	---

ここで最大の難関は3行目である。**vergleichen**(**verglichen** は完了分詞)をどう訳すか、**uns** とは誰か、この2つが問題となる。杉山好氏も磯山雅氏も3行目を「御子が私たちを贖った」と訳している。その他の訳も同様だ。

しかし **vergleichen** には「贖う」という意味は無い。辞書には「比較する、対比する、照合する」あるいはまた「並べる、合わせる、引き合わせる」という意味が載っている。

私はこの改訂前は、「御子が私たちを照合する」と訳していた。救い主たる御子が「救済の名簿と私たちを照合する」というイメージが頭にあったのである。

だが、これはちゃんと全体の文脈が読めていなかった。結局、「**uns** = 罪深き我々」という常識の呪縛から離れられなかった点では、従来の訳と何ら変わりがない。

この歌詞の登場人物は **ich**、**dir**、**dein Sohn** の三者である。**ich** はコラールの主語たる私、**dir** 「あなた」は神、**dein Sohn** 「あなたの御子」はイエスだ。ということは **uns**(私たち)は「あなた(=神)と私」と解釈するしかない。

「あなたの御子(イエス)が、あなた(神)と私を **vergleichen** して下さった。」

文法的には絶対にこう訳すしかない。このコラール全体の主語は **ich** であり、(神、御子、私以外の)不特定多数の第三者が、私と同輩の「私たち」として登場する余地はないのだ。

そもそも **vergleichen** という単語の成分である **gleich** という単語は、このコラールの1行目では「たとえ〜でも」という副詞的用法(=obgleich)だが、基本は「同じ、等しい」という意味である。(そこから「すぐに、直ちに」という意味にもなる。) よって、神と人が、文法的には同格の存在としてあり、その間を「引き合わせる」ことが **vergleichen** という単語の意味なのだ。よって私はこの単語を「仲介する」と直訳した。

ペテロは、3度イエスを否認して神の道からはずれてしまった。そのペテロと自らを同一視した **ich** が、「御子イエスが、神と私を仲介して下さった」と歌ったのが、このコラールなのである。

そして神と人との仲介者イエス、というのは、第29曲の歌詞の中に出てくる言葉でもあるのだ。(er wollt' der Mittler werden.)

3. 第1曲での「helft mir klagen」

この **helft mir klagen** は大抵、「私とともに嘆いて下さい」と訳されている。これについても、私は以前から疑問を抱いていた。「私が嘆くのを助けて下さい」を、ここまで意識して良いのか?と。

そこで、いろいろネットで検索していたら、横浜のハルモニークォールの団員通信の記事を見つけた。その内容を紹介する。

この冒頭合唱の内容は、第1合唱「シオンの娘たち」が、第2合唱「信ずる者たち」に対して、ただ単に「共に嘆いて」と言っているのではない。「来て!見て!そして事態を理解して!」と「訴えている」のだ。第1合唱が訴え、第2合唱が問い返し、第1合唱が問いに答える。その繰り返しだ。そしてついには、再現部において第1合唱が「**Sehet ihn aus Lieb und Huld...**」と歌い始めると、すぐに第2合唱が「**Sehet!**」と歌う。これは第2合唱が事態を理解し、ついには第1合唱と共に外の世界に向かって「訴える」に至ったのである。

klagen という単語には、「嘆く」という意味とほぼ同格で「訴える」という意味もある。

そこで、ハルモニークォールの訳者は「**helft mir klagen**」を「私の訴えを聴いて下さい」と訳された。

私の訴えを助けて下さい、というのは、まずは「私の訴えを聞いて下さい」で、その上で、「私と一緒に、世間に対して訴えて下さい」ということだ。この冒頭合唱は、まさにそういう展開になっているのである。

ただ、私は「嘆き」の意味も捨てきれず、「私の嘆き・訴えを聴いて下さい」と訳すことにした。

4. zu_sehenの訳

改心したユダに祭司長が「Da siehe du zu」、ピラトがユダヤの民衆に「Sehet ihr zu」と言う。

ギリシア語原典の直訳は「自分で見よ」で、ルターもそれを直訳している点は Du sagest's.と同じである。ここについて田川建三氏は、意識するなら「お前(たち)の問題だ」までで、「自分で始末しろ」だと意識しすぎだ、と書かれている。

確かに、祭司長たちはユダに「自分で死ね」と言ったわけではない。ユダの自殺は祭司長たちですら思っても見なかったことだろう。

ピラトも、イエスの処刑そのものをユダヤ人たちにやらせたのではない。十字架刑はローマ帝国の処刑方法であり、ピラトは担当部署に彼の命令で引き渡したのだ。ピラトが「俺には関係無い」と言ったのは、その結果としての「血(の呪い?)」についてなのである。

5. その他

最後の晩餐でイエスは、今後「葡萄から作られたこのような酒を飲むことはない」と言う。この部分、「von diesem Gewächs des Weinstocks trinken」は、何だか持って回った言い方だ。私は最初、Gewächsは「地産のワイン」という意味だから、「今後、この地上のワイン diesem Gewächs は飲まない。父の国で飲むまでは」と訳そうと思った。

しかしこの場面、マルコ福音書ギリシア語原文は「葡萄で作ったもの」、マタイ福音書では「葡萄で作ったこのようなもの」となっている。マタイ著者が「このようなもの」と付け加えたのは「葡萄で作るのは葡萄酒だけではない」かららしい。それをルターは直訳して、マルコでは「vom Gewächse des Weinstocks」としていたのを、マタイでは diesem を付け加えたのである。よって私が考えた"神学的な訳"はボツ！

イエスが弟子たちに「お前たちは私に躓くだろう」と言った。ルターは「躓く」を ärgern と訳した。これは「苛立つ」という意味であり、「躓く＝教え・正道をはずれる」という意味は辞書には無い。

もう1つここで問題なのは、ギリシア語原文では、マルコが単に「躓く」と書いているのに、マタイでは「私に躓く」となっていることだ。「躓く＝正道から外れる」なのに、そこに「私に」がついたことで意味が取りづらくなってしまっている。しかしルターは、マタイのみならずマルコにも「私に an mir」をつけて訳している。やはりルターは、このイエスの言葉を「私に苛立つ」と理解しているようだ。

ルターだけでなく、他のドイツ語直訳聖書の WebSite でも「Anstoß nehmen = 衝突・不快・腹立ちを覚える」と訳している。どうもドイツ人はこの場面をそんな言葉で解釈しているようだ。

私はここはルター訳の直訳ではなく、ギリシア語の原文を訳した日本聖書協会訳・田川建三訳（さらには従来のマタイ歌詞対訳）と同様、「躓く」と訳すことにした。

イエスが十字架に架けられる前に飲まされたのは、ギリシア語聖書では「胆汁をまぜた葡萄酒」だが、ルター訳では「胆汁をまぜた酢 Essig」と訳されている。私も「酢」と訳した。それに対して、死ぬ前に海綿につけて飲まされたのはギリシア語・ルター訳とも「酢」となっている。どちらも結局は「酢になってしまった葡萄酒」のことであろう。

第54曲の受難コラール2番の歌詞「あなたの眼の輝き、それは本来どんな光とも比べられないものなのに」と訳している部分、原文をよく見ると、「kein Licht nicht gleichet」と二重否定になっている。よって文法的には「どんな光も匹敵できないものはない」という意味になるはずだが、それでは意味が通じない。ここは、文法的には誤りだが、二重否定を「否定の強調」に使っているのである。

6. 最後に

私はキリスト教徒ではない。ドイツ語の専門家でもない。歴史を専攻した私は、実在した人物イエスの物語に関心があるのだ。「マタイ受難曲」はキリスト教徒でない人々にとっても、「傑出した人格者イエスとその周囲の人々についての音楽物語」として胸を打つ感動的な内容になっている。だからこそ、徹底的に直訳してみよう、と私は思ったのである。史料に忠実に向かい合えば、真実は自ずから史料が語ってくれるはずだからである。

何よりも Du sagest's.問題をクリアして、聖書の受難物語の筋道と、それに忠実に曲をつけたバッハの解釈が明確になったと考えている。